彫刻部門審査評

まずは何よりも、前回の 16 点から６割強の大幅増となる２６点の出品を得たことを喜びたい。他部門も合わせた全体の出品数も前回に比して２２点の増加であったという。全国的に人口の減少が進行し三重県もその例外ではない状況にありながらも出品点数が増加傾向を示していることは、文化活動が県民のあいだにしっかりと根付き若い世代を巻き込みながら成長を続けている様を物語るものだろう。彫刻部門に限って見ても、出品者の約３割を30 歳以下の若年層が占めるという事実がそれを裏付けている。

今回の出品作を見渡した印象を一言で表現すると「多様」である。素材、技法、プレゼンテーションの形式、テーマ等いずれにおいても実に多様性に富んでおり、各人がそれぞれの思い、それぞれのスタイルで自律的に造形活動に向き合っている姿が偲ばれてとても好感が持てた。その中から 14 点を入選としたが、多様であるがゆえにあらかじめ明確な評価基準を設けることは困難であった。そのため、まずは審査員各人がそれぞれの視点で入選候補作品に票を入れたのだが、一回の投票でほぼ異論なく入選作品が決定し、基本的に複数の票が集まった作品に賞が授与されることとなった。結果から振り返ると、評価のポイントは技術の高低のみならず、先に挙げた素材、技法、プレゼンテーションの形式、テーマそれぞれが必然性を持ちながら結びつき一つの表現をかたちづくっているか否かであったように思われる。荒々しいテクスチュアを持つ鉄のシートによって巧みに構成された最優秀賞の《[生命の輪郭] 夢食う鶏》、粘土の特性を活かした重量感のある造形とテーマとが深く響き合う優秀賞の《ボクの鎧》をはじめ各賞の受賞作品にあっては、そのことがより過不足なく実現されているように見受けられる。今後とも彫刻部門が多様性を保ちつつ成長して行くことを大いに期待したい。

彫刻部門審査主任
野中明